

後発国援助に焦点

難民救済や発展途上国へのさまざまな協力に見られるように、カナダは、南北問題に早くから熱心に取り組んできた。

一昨年から昨年にかけてのトルドー首相やマッギガン外相の、中南米、アフリカ、東南アジア歴訪や、カンクンでの南北サミットにおけるカナダの積極的姿勢は、そのひとつのあらわれといえる。

南北問題に対するカナダの基本方針や考え方を、昨年十月、マッギガン外相がモントリオールのカナダ未来学会で行った講演からご紹介しよう。

* * *

「南北関係」には、さまざまな活動が含まれている。なかでも中心となるのは物や人、サービス、資本、思想、技術、あるいは権限の移転ないし交流である。これらの移転がいかにして、いかなる条件の下に起こるのか、あるいは起こりうるのか——南北関係の中心課題はここにある。

南北間の交流がさかんになるにつれて、相互の依存度も強まってきた。移転はもはや一方通行ばかりとは限らず、アンバランスな関係は少しずつ改善されつつあ

る。きわめて大きな重要性をもつ南北間の相互依存という点について、先進国側にも認識の変化が出てきたように思われる。最近出されたブランド報告は、こうした傾向の促進に大いに役立った。私は、この認識の変化自体が、ひとつの希望の灯だと考ええる。

南側の大部分の国、とりわけ後発途上諸国が、今後長期にわたって、開発のための直接援助を必要とすることは明らかである。

これらの国々には、現代の最新技術がもたらす恩恵にも縁遠く、また南北対話の結果予想される国際機関の改革や貿易・決済制度の改革にも、ほとんど利益を得ることはないだろう。後発途上諸国の経済構造は、南側の中でも比較的進んだ国々には全く異なる、最も急を要する問題を抱えている。

三分野を優先

カナダの開発援助は、こうした後発途上諸国に焦点を当て、カナダが最も貢献

できる分野を中心に、カナダのもっている経験と専門技術を生かした援助計画に力を入れていく方針である。二国間援助では、農業、エネルギー、人的資源の三分野を優先する。カナダのもつ能力と途上国の将来的ニーズがびたりと合致するのは、この三分野だからである。また今後の重点は、食糧援助や大規模な産業基盤整備計画といった従来の援助形態から、人間の技能開発を目的とする援助へ次第に移っていくであろう。

一九八〇年代は、食糧危機がいよいよ昨年十月二十一日—二十三日の三日間メキシコのカンクンで開かれた初の南北サミットで、トルドー首相は、メキシコのポルティエーヨ大統領と共に共同議長をつとめた。

参加二十二か国（途上国十四、先進国八）が食糧安全保障、農業開発、一次産品、貿易、工業、エネルギーなどをめぐって白熱した討議を展開した中で、カナダのトルドー首相とマッギガン外相が世界から貧困をなくすために大同団結することの重要性を一貫して主張した。また、トルドー首相は開会の挨拶で、各国が相互理解を深め、共通の協力優先事項を定める必要性を強調するとともに、全世界的な問題は全世

包括交渉を支持 南北サミットで

現実になると言われている。最近数十年間に、世界の食糧貿易は飛躍的に増加したが、その反面、少なくとも主要食糧だけは自給していた（あるいは輸出もしていた）国々が、今日ではそれさえも輸入に頼っているというマイナスを生んでいる。カナダは今後の食糧援助計画について、途上国が食糧や農業生産上必要なタネ・肥料などの面で自立できるように能力を開発するのを手伝うこと、そしてこれらの国を輸入農産物への依存状態から抜け出させること、を目標にしている。

界的に討議すべきだとして、国連包括交渉への支持を再確認した。

カナダ政府は、カンクン・サミットで各国の指導者が、重要な問題について格式ばらず、自由かつ建設的に意見交換ができたことを高く評価している。イデオロギーや思想の不一致にもかかわらず、



南北サミットで共同議長をつとめたトルドー首相(左)とポルティエーヨ大統領。

食糧や農業問題などの優先事項を決め、また参加国すべてが同意できる包括交渉を進めるという結論に達した意義は大きい。